

春爛漫

女高師附屬高女 水谷年惠子

春宵一刻值千金

蘇軾

○ 奈良七重七堂伽藍八重櫻

芭

蕉

とはかゝる夜か。

花の雲鐘は上野か淺草か

同

しめやかに思ひ餘れるいきをして

西も東も花盛り、春が櫻か、櫻が春か。

柳の奥に上り來る月

與謝野晶子

うらくとどけき春の心より

その銀色にぶく輝く夕月夜、土も石も紺色に

にはひ出でたる山櫻ばな

加茂 眞淵

滯れて、そつと吐息をついてゐる。

○ み吉野の櫻咲きけり帝王の

○

上なきに似る春の花かな

與謝野晶子

「春はあけぼの」

○ 清水へ祇園をよぎる櫻月夜

今宵逢ふ人みな美しき

やうく白くなりゆく山際の少し白んで、紫に

艶なるゆふべ、おぼろに匂ふ花と月、行逢ふ人

は皆美しくして。

ほの色から、美しく晴れやかに生れいつる春のあけぼの、天地の胸のときめき初むる春のあけぼの、ほのくくと明くる此の春のあしたを、誰か愛せぬ

者があらうか。

惜^シ花^ヲ春^ノ起^ル早^シ

杜 詩

あくるを待たで起き出づる詩人もあり、

春^ノ眠^レ不^レ覺^ユ曉^ヲ

處々聞^ル啼^ク鳥^ノ

孟 浩 然

覺めもせず、眠りも果てぬ夢うつゝ、夜はあく

れども纏綿たる詩情の境地、こゝ六尺の床上に横

つて、枕に通ふ鳥の音を、うつらくと聽く詩人

もある。

とばり垂れて君いまださめづくれないもの

牡丹の花に朝日さすなり 正岡 子規

夢に香あり、色あり。その香高く、その色濃く

牡丹くづれてなほも覺めずか。

○

かはづ鳴くかひなび川に影見えて

今や咲くらむ山吹の花 厚 見 王

駒とめてなほ水かはむ山吹の

花の露ちる井出のたま川

藤原 俊成

○

春の海ひねもすのたりかな 蕪 村

夜も亦のたりかな。

春日野に煙立つ見ゆ少女らし

春野のうはぎ摘みて煮らしも 萬葉集

なつかしや、萬葉の少女等は春の野に出て嫁菜

を摘んで、白い煙を立て、その嫁菜を煮たので

あつた。今もかはらぬ嫁菜は萌える。春日野に行

つて、その少女等に逢ふよしもがな。

○

紅白花^ハ開^ク煙^ノ雨^ノ中 失 名

千枝^ノ紅^ク雨^ノ萬^重烟 袁 枚

咲くも、にほふも雨の中、濡れて色増す春の花

そゝいで薫る春の雨、花の時節の春雨や、花笠か

させ谷の鶯。

すみだ川^ヲ蓑^ヲ着^テて^クだ^スい^カだ^シに

かすむあしたの雨をこそ知れ 加藤千蔭
權の雫も花と散り、水の面は花のあや錦。

○ 山里の春の夕暮来てみれば

いりあひの鐘に花ぞ散りける 能因法師

うら／＼に照れる春日に雲雀あがり

心かなしもひとり思へば 大伴家持

世を墨染の衣に隔てし能因法師も、春の寂しさを泣いたであらう。今を爛なる春の野に立つて、春の哀しさを、家持はひとりしみ／＼と哀しんだであらう。それにしても、能因も家持も、爛漫たる春それ自身がす／＼泣く音をきいたであらうか。

○ 見渡せば西も東も霞むなり

君はかへらすまた春や來し 九條 武子

あゝ春、花に媚あり、雨に情あり、燈火は紅に

して君はかへらす。無量の哀愁を含んで、美しき人のひとり、几帳のかけに籠れるは、いたはしいものゝ極みである。

○ 陥頭楊柳枝

已_ニ被_ルニ春風吹_カ

妾_ガ心正斷絶_ス

君_ガ懷那得_ル知_ルコトヲ

郭 振

路端の柳の枝が春風に吹かれてゐるのを見て、心正に斷絶すと悶えつゝつれなき人を恨む妻の怨恨は、春が焰と燃ゆるのであらう。